金沢大学英文学会 The Society of English Literature, Kanazawa University

NO. 10 NewsLetter 2018.11.1

★金沢大学英文学会は、1953 年 1 月第 1 回卒業生の予餞会で結成。年 1 回総会と講演会・研究発表会を開催、学会誌 *KES* は 1954 年創刊、現在 30 号を数える。

会員のみなさま、お変わりございませんか。NewsLetter 10 号をお届けします。本年度の運営委員会がさる 7 月 28 日に開催され、本号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

何をもってシェイクスピア的というか

高田茂樹

今年度一杯で定年退職ということで、二六歳で初めて大学に就職してから四〇年近く、金沢大学だけに限っても二九年に亘って在籍してきたのが終わるわけだから、それなりに深い感慨があってしかるべきだろうが、何かと雑務に追われて、ゆっくり感慨に浸っている余裕などなかなかない。まあ、そういった感慨は、実際に仕事を辞めて、本当にやるべきことがなくなったときに初めて、寂寥の念とともに湧いてくるものなのかもしれない。

大学での仕事もそうだが、研究の対象という点でも、大きく変わることなく、卒業論文に『ハムレット』を取り上げた頃から含めると四十数年にわたって、「専門は何ですか」と聞かれて、「シェイクスピアの辺です」というような答え方をしてきたわけで、むしろ、そちらの長さにこそ感慨があってしかるべきかもしれない。実際、シェイクスピア自身が芝居を書いていたのは、一五九〇年頃から一六一〇年前後の約二〇年と考えられているから、本人が作品を書いていた期間の倍かそれ以上に亘って、彼の芝居を生活の糧としてきたことになる。もちろん、その間、シェイクスピアの芝居だけに関わってきたわけではないが、それでも、関心の中心にシェイクスピアの芝居があったことに変わりはなく、他に才覚がなかったからとはいえ、飽き性の自分としてはよくまあ長続きしたものである。

長く関わってきたからといって、特別深い洞察を得たということもないが、最近になって、シェイクスピアらしさというのは、いったい何だったのだろうというようなことを少し考えることがある。一五八〇年代末から九〇年代初頭にかけて、シェイクスピアが登場してきたとき、彼の作品はほかの作家の作品といったい何が違っていたのだろう、どうして彼の作品がとりわけ広く受け入れられ、他の作家たちの作品を凌駕するような人気を博して、さらにそれが時代を超えて生き残っていくことになったのだろう、といったことである。

シェイクスピアがロンドンで劇作家として活動し始めてまだそれほど時が経過していなかったと考えられる一五九二年、劇作家としては先輩に当たるロバート・グリーンという文士が、『一文の知恵』という半ば自伝的な冊子の中で、自分たちの仕事がうまくいかなくなっているのは、「われわれの羽で飾り立てた成り上がりのカラスがいて、虎の心を役者の皮で包んで、だれよりもうまくブランク・ヴァースを朗唱できると思っている。そして、ただの何でも屋のくせに、国中で舞台を揺り動かすことができるのは自分一人だとうぬぼれているのだ」と罵詈雑言を並べ立てた。この文の中の「虎の心を役者

の皮で包んで」という言葉が、シェイクスピアの『ヘンリー六世・第三部』の中の「虎の心を女の皮に包んだ」という台詞をもじったものであるとされ、また、「舞台を揺り動かす」（Shakescene）という言葉はシェイクスピアの名前を折り込んだものと見なされており、全体としては、要するに、役者上がりの無学なシェイクスピアが自分たちの劇作のスタイルを模倣して成り上がってきて、自分たちの仕事を奪っていると怒っていると取れる具合になっている。ほかのさまざまな状況証拠と重ね合わせて、おそらくこの頃までに、シェイクスピアはロンドンの演劇界で新進の劇作家としてそれなりにかなり高い評価を受けるようになっていて、それが先輩の劇作家たちの脅威と映るようになり、時には嫉妬の対象にさえなっていたと考えられるのである。

グリーンの文章が、その悪態を通して、この時期のシェイクスピアの評価の高さを伝えているとすれば、やはりシェイクスピアにとっては先輩格の作家トマス・ナッシュの冊子『文なしピアスの悪魔への嘆願』（一五九二）の中の一節は、もっと直截にシェイクスピアの初期の芝居を讃えた言葉と解されている。彼はここで、かつてフランスを恐怖に陥れていたイングランドの武将トールボットが、二百年以上に亘って墓の中に横たわっていた後で、再び舞台に蘇って、その勇壮な姿によって当代の人々を感涙させて、彼らを叱咤し鼓舞すると語っているのだが、これはおそらく同じ『ヘンリー六世』の『第一部』に重要な役回りで登場するトールボットのことを指していると考えられており、それはこの芝居に対する当時の観客の反応を示す一つの貴重な指標と見なされている。

実際、この頃、ロンドンの舞台では、イングランドの内乱の歴史などに取材した英国史劇が多く書かれているが、それらは、一五八六年に発覚した、時の君主エリザベスを暗殺して、当時イングランドに亡命してきていた前のスコットランド女王メアリー・スチュアートを王座に据えようとするバビントン陰謀事件や、翌八七年のメアリーの処刑、さらに、その翌年のスペインの無敵艦隊の侵攻などを受けて、イングランド国内のナショナリズムが異様なまでに高揚していたことを背景にしており、シェイクスピアの『ヘンリー六世』もそういった時代の雰囲気の中で書かれた作品であると言えよう。批評家によっては、フランス軍の臆病で呪わしいありさまとイングランド側の英雄的なありようが対比されて、そのイングランドの勝利に終わるというところにこの芝居の愛国主義的な帰結を見る向きもある。

そういった時流に呼応した要素を、作品の中に多く盛り込んでいるという点では、シェイクスピアの作品も、他の作家の作品も、さしたる変わりはないだろう。実際、そのことだけではなく、彼の作品の中で表されているさまざまな要素について、一つ一つを取り上げて見てみると、その多くはほかの作家の作品にも認められるだろう。そういった中で、では何をもってとりわけシェイクスピア的といえるのか、という最初の問いに立ち返ると、一つの見方としては、そういった要素の組み合わせ方、複数の要素を突き合わせることで、全体として浮かび上がってくるヴィジョンといったものではないだろうか。

例えば、その勇壮な姿とつねに国と君主を思う真情で人々に深い感銘を与えたトールボットも、『第一部』全体として見れば、イングランド国内の貴族たちの仲間同士の反目と怠慢のために孤立無援の戦いを強いられ、馳せ参じた息子ともども戦死することになり、トールボット的な英雄像はむしろ失われてゆくものとして表されている。

劇の結末で、遅ればせながらやってき

たヨーク率いるイングランドの援軍が、フランス軍を駆逐し、一人見捨てられたジャンヌ・ダルクは、悪魔と交わった呪わしい存在として、イングランド側の嘲笑の中で、見苦しく命乞いをして、それでも叶わないのを見て取ると、一転してイングランドを激しく呪いながら、火刑に処されるが、おぞましさの見本のようにして葬られるこのジャンヌも、少なくとも劇の前半では、滅亡の淵にある祖国のために敢然と立ち上がって、ばらばらになっていた同胞を鼓舞して団結へと導く存在として、むしろ好意的に描かれている。

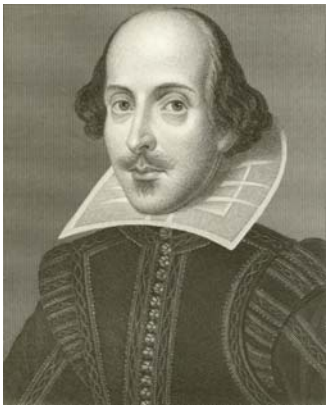
そして、臆病なフランス軍を駆逐するそのヨークはと言えば、一方で、トールボットを見殺しにした張本人の一人であり、構成としては続編だが、実際には先に書かれたと推定される『第二部』、『第三部』では、国を混乱に陥れる元凶のように描かれているのである。実際、形としてはイングランドの勝利に終わるといいながら、この戦いで、イングランドはフランス国内に持っていた領土のほとんどを失って、撤退を余儀なくされているのであり、自暴自棄の悪態としか聞こえないジャンヌによるイングランドへの呪いは、『第二部』・『第三部』を通してことごとく実現されてゆくことを、観客の多くはすでに知っている。

これは単に物事にはいろんな側面・見方があるとする複眼性といったことではなく、むしろ、一つの立場、一つの見解を取るように一方で仕向けながら、同時にそういった立場・見解を取ることの無理を提示する、しかもそれでいて、いかなる立場、視点もあり得ないという一般的な懐疑でことを終わらせるのでもなく、そういった背反する立場・見解を示された側が、では自分にはいったいどういう立場、視点があり得るのか、そして、それは本当に妥当なものなのか、自らに繰り返し問い続けるよう迫る、そういった仕組みになっているのではないだろうか。

実際、このように、観客・読者に自らとのあいだに終わりのない内的な対話を交わすよう迫るという傾向は、こういった場面だけでなく、さらには、初期の歴史劇に限られるものでもなく、ジャンルを超えて、シェイクスピアの作品全体を貫く特質になっていったように思われる。

彼の作品のこういった性格が何に由来しているのか、特定することは容易ではないが、こういう特質は、シェイクスピアの芝居を観たり読んだりした人がみなそのことを明確に意識して捉えるか否かということとは別に、どこか深い余韻、味わいとして残って、そのことは、長い目で見れば、エリザベス朝の演劇を変えてゆく大きな力となって、さらには、彼の作品にしだいにほかの作家の追随を許さない文化的なキャノンという地位を与えてゆくことに繋がったのではないだろうか。

◇◆◇◆◇◆◇◆



2018年度金沢大学英文学会
総会プログラム

日時：**2018年12月1日（土）**

第1部　10:00～12:10

第2部　13:30～17:00

会場：**金沢歌劇座（大練習室）**

〒920-0993 金沢市下本多町6番丁27
（TEL: 076-220-2501）

◇◆◇◆◇◆◇◆

総会第1部　研究発表会
（10:00～12:10）

10:00～10:25　白石 崚太朗（M2）
「英日翻訳にみられる役割語の果たす役割について」

10:25～10:50　山田 美紀（D1）
「英語過去時制の「非過去」の用法について―疑問文 Did you ever...?の用法を中心に―」

10:50～11:00　休憩

11:00～11:35　市川 泰弘（日本工業大学）
「V + oneself + up に関する一考察」

11:35～12:10　小松 恭代
（石川工業高等専門学校）
「ヨシコ・ウチダと強制収容」

◆◇◆

総会第2部（13:30～17:10）

13:30～14:10
開会の辞　高田茂樹会長
総会　1. 次期役員について
2. 会計報告
3. 会の活動報告
4. その他

14:10～14:50
大学職員の卒業生による大学の国際化に関する報告
轡田 友里　（H20年卒業）
木谷 真理子（H26年卒業）

14:50～15:00　休憩

15:00～15:50　講演
「認知言語学の今後の課題：言語の変異と変化を捉えるために」
渋谷 良方（金沢大学）

15:50～16:00　休憩

16:00～16:50　講演
「ホラー映画の〈意味〉―ジョージ・A・ロメロ監督作品のサブテキスト」
小原 文衛（小松大学）

17:00　閉会の辞　和泉邦子副会長

◆◇◆

18:00～20:00　懇親会

会場：Full of Beans
金沢市里見町41-1
（TEL: 076-222-3315）
会費：4,500円

◇◆◇◆◇◆◇◆

≪只今留学中≫

★ゲント大学より

３年　中川 奈月

私は今ベルギーのゲント大学に留学しています。ゲントはベルギーでブリュッセル、アントワープに次ぐ第三の都市で、学生の街と言われていることもあり、街は朝から晩まで学生で溢れかえっています。街並みはとても美しく、通学路を歩くだけでも十分ヨーロッパ気分を味わうことができますが、少し中心街のほうへ足を運べば、本当に美しい光景が広がっています。ゲント大学には多くの正規学生に加え、ヨーロッパを中心にたくさんの留学生が通っており、様々な文化に触れることができます。日本とは全く異なる文化を持つ国の人々から話を聞くのは面白く、互いの国の料理を作りあうなどの異文化交流は非常に楽しいものです。現在は語学学校での授業を含め、英語学やオランダ語の授業など週６コマの授業を履修しています。中でも Introduction to Foreign Language Training for Adult という授業は、内容が非常に興味深く、とにかくめちゃくちゃ面白いです。しかし、授業のまとめとして、自分で授業を構成し母語を他の学生に教える個人プレゼンがあるので、それには今から怯えています。生活面に関しては、寮の近くのお店で大体の日用品を揃えられたり、キャンパスが寮から比較的近いところに位置していたり、と生活のしやすい環境であると感じます。お風呂が大好きな私にとってシャワーのみの毎日は少し辛いものですが・・・。

さて、ここまで読んでみると一見そこそこ順調な留学生活を送っているように思えますが、実際のところは、厳しい現実と苦闘する日々を送っています。私の語学力では、生活を送ることはできても、細かい意思疎通を図ることや授業内容を理解することは非常に難しく、能力の低さに自己嫌悪に陥るばかりです。それに加えヨーロッパの学生は語学に堪能で、多言語を流暢に話す姿を目の当たりにすると、どうして自分は英語も話せないのか、と情けない気持ちになります。また、私はこの１ヵ月半で語学力に限らず、人間的な側面においても、たくさんの短所を発見しました。そのような語学力と人間性の欠落を思い知るというダブルパンチは私を最高に落ち込ませていますが、一方で自分を変えるなら今しかないとも思わせてくれています。

自分の気付きや出会いを大切に、そして今自分がこの環境にいれることへの感謝を忘れず、たくさんのことを吸収し、胸を張って帰れるように、残り８ヵ月過ごしていきたいと思います。

《 平成 29 年度卒業論文題目 》

今井 大悟　An Analysis of the Dystopia in George Orwell's *Nineteen Eighty-four*

小田 聖稀　The Representation of Motherhood in *Batman vs Superman*: *Dawn of Justice* and *Suicide Squad*

喜多 友香　A Semantic Comparison between Japanese Proverbs and Their English Equivalents

嵯峨 祥太郎　On Color Expressions in English Compared with Japanese Ones

柴田 裕一　Why was "No-No Boy" Re-evaluated in the 1970's?

須藤 綾　A Case Study of Nominalization by Suffixes *-tion* and *-ness*

武田 彩香　On the Meaning of *Can*

寺松 倫平　The Speaker's Intention When Using the Expressions like "Come on," "Look," and "Listen"

永尾 あゆみ　A Study of English Expressions to Show "Low Price"

別所 澄弥　A Comparison of Japanese and English Baseball Terms

宮越 星　A Comparative Study of Subjectivity in *Toki wo Kakeru Shoujo* and Its English Translation *The Girl Who Leapt through Time*

柳川 大亮　An Analysis of *Dracula*

米澤 美紀　The Symbolic Deaths in *The Great Gatsby*: Premonition of the End of the Value of 1920's

麻生 一青　Milkman's Search of Identity: Meaning of Flight in *Song of Solomon*

百田 美穂　A Study of Tense in English and Japanese with Special Reference to the Present Perfect Tense

《 平成 29 年度修士論文題目 》

荒井 悠翔　A Cognitive Linguistics and Pragmatics Approach to English Expressions to Show Understanding

《 在学生の状況 》

＜学生数＞

2 年生　10 名（男性 3 名、女性 7 名）
3 年生　 9 名（男性 2 名、女性 7 名）
4 年生　14 名（男性 6 名、女性 8 名）
院生
　修士課程　2 名（男性 2 名）
　博士課程　4 名（男性 3 名、女性 1 名）

＜過去 3 年間の主な派遣留学先＞

シェフィールド大学、セントラル・ランカシャー大学（英国）、ネヴァダ大学リノ校、ニューヨーク州立大学ニューポルツ校、バッファロー校（米国）、ゲント大学（ベルギー）他

今年の 9 月から 4 名の学生が派遣留学に行きました。留学を希望しない学生でも、在学中に、語学研修や大学が企画する短期の異文化体験プログラムに参加する学生が増えています。

＜過去 3 年間の主な就職先・進学先＞

北陸三県の教員、県庁・市役所の職員、大学職員、コンピュータ関連、運輸関連などの民間企業他

進学先：金沢大学大学院など

民間企業の内定は例年より早く出たようですが、公務員や教員の採用試験は 9 月まで及び、就職活動自体は依然として長期化の傾向にあります。

＜平成 29 年度（11 月～3 月）及び 30 年度の院生による研究発表等＞

◆平成 29 年度（後半）研究発表

・2017 年度金沢大学英文学会
（12 月 2 日：金沢歌劇座）

荒井 悠翔
「了解表現」の意味分析－"I understand." を中心に－」

廣田 篤
「クジラ構文の類型と論理性に基づく構文分析－対偶的解釈の射程－」

茶谷 丹午
「ラフカディオ・ハーンにおけるスペンサー哲学受容の評価を巡って」

◆平成 30 年度　研究発表

・日本認知言語学会第 19 回大会
（9 月 8-9 日：静岡大学）

高島 彬「証拠性「らしい」のミラティブへの拡張」

・英語語法文法学会第 26 回大会
（10 月 20 日：立命館大学）
山田 美紀「Did you ever...?と Have you ever...?の用法とその分布」

《 ２０１７年度会計報告 》

以下の会計報告は、12 月の総会に諮られます。

2017 年度金沢大学英文学会会計報告
（2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日）
会計　正木恵美・屈莉
会計監査　西多喜代子

収入	**3,097,429 円**
（内 前年繰越金	2,357,411 円）
支出	**258,942 円**
2018 年度への繰越	**2,838,487 円**

【収入内訳】（円）

中村芳久先生からのご寄付	300,000
2017 年度 KES 会費（在学生分、総会時支払分、振込分）	194,000
維持費	138,000
懇親会費	108,000
利子	18
小計	**740,018**
2016 年度繰越	2,357,411
合計	**3,097,429**

【支出内訳】（円）

KES, ニューズレター発送関連	
用紙等備品	10,760
送料	93,120
2017 年度総会用	
お茶代・花代・備品	9,275
総会施設利用料（金沢歌劇座）	21,220
懇親会費	121,500
岡部匠一先生への弔電	3,067
合計	**258,942**

《 事務局より 》

1. 会費の納入について

同封の振込用紙にて、2018 年度会費 2,000 円の納入をお願い致します。ぜひ、会費と共に維持費（一口 2,000 円）もよろしくお願い致します。これまでご納入頂いてない方も、当学会の運営状況をご理解の上、何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

○会費・維持費等の振込先：
ゆうちょ銀行
口座記号：００７２０－６
口座番号：１６１７１
加入者名：金沢大学英文学会

2. 総会、懇親会の出欠について

同封の葉書（S50 年卒までの方に同封）、または E メールにて、総会及び懇親会の出欠を 11 月 27 日（火）までに事務局までお知らせください。その際には、ご氏名（旧姓）、卒業（修了）年、ご住所、（お葉書の方は）メールアドレスをご記入願います。また、ご近況もぜひお書き添えください。頂いたお葉書やメールは、大事に保管し、総会時に閲覧できるよう受付に置いておきます。どうぞよろしくお願い致します。

3. KES 30 号、31 号について

KES 30 号＜中村芳久先生退職記念号＞は発刊が大変遅れましたが、12 月に皆さまにお送りいたします。なお、KES は 2015 年度から一度でも年会費または維持費をお納めくださった会員の皆さまにお送りすることになっております。

また、KES 31 号は＜高田茂樹先生・和泉邦子先生退職記念号＞として、御論稿や先生方との思い出を綴ったエッセイ（1,000 字程度）を募集いたします。エッセイは、どなたでも投稿できますので、奮って一文をお寄せください。刊行はご退職から 1 年遅れとなりますが、2019 年

度発刊予定です。御論稿、思い出をお寄せいただける方は、まずは事務局までご一報ください。

◇岡部匠一先生ご逝去

金沢大学名誉教授で英語学をご指導くださいました岡部匠一先生が本年 3 月 20 日にご逝去されました。ご葬儀の際には、本学会より弔電を送らせて頂きました。

先生の授業では、古英語の『主の祈り』や Chaucer の *The Canterbury Tales* の冒頭部分の暗誦が課題として出され、先輩方のお手本を何度も聞いて、一生懸命覚えたことが思い出されます。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

◆金沢大学英文学会役員(H31 年 3 月まで)

会長	高田茂樹
副会長	黒川顕成・和泉邦子
事務局	堀田優子・川畠嘉美
会計	正木恵美・屈莉
監査	西多喜代子
KES 編集委員会	
（英文学）	高田茂樹　宮本正秀
（米文学）	和泉邦子　小原文衛
（英語学）	堀田優子　市川泰弘
広報委員	柳川三千代
運営委員	市川泰弘　宮本正秀
	小林隆　向井理恵
	中谷博美
院生委員	髙島彬　茶谷丹午
	廣田篤　山田美紀
	白石崚太朗　柴田裕一

《 編集後記 》

今年の総会は、午前の部では、2 名の院生と市川先生、小松先生の研究発表（英語学 3 件、文学 1 件）があります。午後の部では、卒業生で金沢大学職員の轡田さんと木谷さんが金沢大学の国際化への取り組みについて、教員とはまた違った視点からご報告くださいます。その後、今年はお二人の先生にご講演をお願いしました。お一人目は、中村先生の後任として 4 月に着任されました渋谷先生、お二人目は、4 月から小松大学に移られました小原先生です。全く異なる内容で、刺激的なお話を伺えるのではと今から楽しみです。

今年度末をもって、高田茂樹先生と和泉邦子先生が定年退職を迎えられます。卒業生の皆さまにおかれましては、ぜひ、KES 総会にご出席いただき、先生方と思い出話など、楽しいひと時をお過ごしいただければと思っております。

大学では、人文学類内の研究室が他の研究室と融合していくつかのプログラムを形成する話が具体化してきました。今後、学生の所属意識が変化してくる可能性もあり、英文研究室の維持が大きな課題となってまいります。そのような中で、昨年の総会の折に、中村芳久先生より本学会に対し、多大なるご寄付を頂き、大きなご支援を賜りました。これからも、先生方や卒業生の皆さまからのご理解とご支援を支えに、KES の一層の発展に努めてまいりたいと存じます。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。(Y. H.)

金沢大学英文学会ニューズレター　No. 10
2018 年 11 月 1 日発行

〒920-1192　金沢市角間町
金沢大学人文学類 英語学英米文学研究室
金沢大学英文学会
代表者　高田茂樹

E-mail：kesoffice.kanazawa@gmail.com
URL：http://english.w3.kanazawa-u.ac.jp/